

SDGsをグリーンウォッシュに使うな

畠山 武道

環境と開発に関する世界委員会『われら共通の未来』（一九八七年）は、環境保護と（経済）開発を調和させるために「持続可能な開発」という概念を提示し、「環境と開発はいやおうなしに結びついている。開発は悪化する環境資源を基盤にして生き延びることはできない」とのべた。開発は環境によって制約されるという主張は、今日にも通用する卓見であり、リオ・サミット（一九九二年）で採択されたリオ宣言の第四原則にも明記された。

しかし、ヨハネスブルグ・サミット（二〇〇二年）以降は、途上国を中心に社会的要素（政治や社会の変革）を重視する傾向が一段と強まり、「持続可能な開発」とは経済・社会・環境の三つを進展させ、統合する概念だという考えが世界に浸透した。ところが、各国の取り組みはいっこうに進まない。そこで分りやすい目標や指標が必要であるという声が高まり、二〇一五年九月の国連総会で採択された「持続可能な開発のための二〇三〇アジェンダ」では、一七の目標、一六九のターゲット（具体的目標）およびグローバル指標（比較のための数値）が示された。これが「持続可能な開発目標（SDGs）」である。

しかし、前身である「ミレニアム開発目標（MDGs）」（二〇〇一年）がそうであった

ように、SDGs目標の大部分は主に途上国の経済・社会・環境の改善をめざしたものであり、先進国が都合のよい目標をつまみ食いし、自国の成果を誇示することは難しくない。日本政府は二〇一九年のSDGs達成度評価で、一六二カ国中一五位にランクされたことに気を良くしたのか、同年末に作成した「SDGs実施指針改訂版」の四頁では、「我が国は、持続可能な経済・社会づくりに向けた先駆者、いわば課題解決先進国である」とし、国際社会に示すような実績を積み重ねていると自画自賛する。本当なのか。

では、肝心な「環境」を見てみよう。SDGs一七の目標のうち環境に関連するのは（わずか）三つである。国の「SDGsアクションプラン二〇二〇」には、優先課題⑥「生物多様性、森林、海洋等の環境の保全」のための主な取組が四頁にわたり列挙されているが、国立公園満喫プロジェクトをはじめ、大部分は農水省や環境省所管の手慣れの事業を並べ直したもので、既視感満喫である。

ただし、SDGsそのものが悪いわけではない。SDGs目標⑤「陸域生態系の保護・回復・生物多様性損失の阻止」の項には、二〇二〇年または二〇三〇年を目標に、持続可能な森林経営、生物多様性を含む山地生態系

の保全、危機にある種の保護と絶滅の防止、侵略的外来種の侵入防止、保護された野生生物の密猟・流通の終結・違法野生生物製品の取引への対処など、一二のターゲットが詳細に記されている。これらの項目は、国内のNGO、研究者、実務家が長く改善を要求してきたものであり、積極的な取組が強く求められるが、国のアクションプランからは、「やっつける感」すら伝わってこない。

さらに国のアクションプラン優先課題⑥「省・再エネルギー、防災・気候変動対策」の項には、相も変わらず、革新的な原子力技術の開発、原発立地地域の支援・地域振興策の拡充、それに海外から集中砲火をあびた火力発電技術の海外展開などが鎮座しており、これでは、真面目にSDGsに取り組む団体・企業・個人の顔に泥を塗るに等しい。これをグリーンウォッシュ（環境問題に配慮しているふりをすること…ジーニアス英和辞典（第五版））というのだろう。

国のアクションプランは、再生可能エネルギーの普及促進、洋上風力発電や地熱発電の事業化支援も明記する。しかし、北海道では、森林・海岸・海洋の景観を根こぎにした大規模風力発電所や、住宅地にまで侵入した太陽光発電所の乱立に住民は悲鳴をあげている。これでは、SDGsに名を借りた環境破壊である。まずは、SDGs目標⑥のターゲット7参加型意思決定等の確保、目標⑦ターゲット17市民社会のパートナーシップの強化・推進を絵空事にしないために、これらの住民の切実な声をきいてほしいと思う。

へはたけやま たけみち 北海道大学名誉教授